

原著論文

## 岩手県のビーチボール競技愛好者の震災前後の意識変化

内野 秀哲 後藤 満枝

Hidetaka Uchino, Mitsue Goto: The change in consciousness of Beach Ball enthusiasts in Iwate Prefecture after the Great East Japan Earthquake. Bulletin of Sendai University, 44 (2) : 81-91, March, 2013.

**Abstract:** The health conditions of people who have been living in a shelter or a makeshift house after the Great East Japan Earthquake have deteriorated. Their lack of exercise has become a problem.

Recreational sports, such as beach ball, are suitable to relieve a lack of exercise.

This study compared consciousness change about playing beach ball before and after the earthquake disaster. Beach ball players of Iwate Prefecture were surveyed.

Participants felt more joy playing beach ball with friends after the earthquake disaster. They learned about beach ball activities from community centers.

Considering the meaning and motives of participation, it is necessary to change the support service of recreational sports according to each situation after disasters.

This study showed that the support service is important to improve mood. However, change should not be forced. Rather, the support should adapt according to each situation.

**Key words:** Great East Japan Earthquake, Support service, Recreational sports

キーワード: 東日本大震災, 支援活動, レクリエーションスポーツ

### I. 緒言

東日本大震災後の2011年5月6日からおよそ2ヶ月に1回の頻度で、宮城県栗原市に在住するビニールバレーボール愛好家と大学生のビニールバレーボールサークルからなる有志ボランティアとともに、被害の大きかった沿岸地域の石巻市・東松島市などに居住する人たちの健康づくりに向けた活動支援を実施した。初回の会場として、震災の難を受けながらもどうか使用可能であった、宮城県栗原市内の小学校の体育館<sup>1)</sup>を利用したが、その後も、被害の大きかった沿岸地域の体育館などが利用できるようになるまでの間は、比較的被害の少なかつ

た県内の内陸にある施設を主な会場として利用した。沿岸部である石巻・東松島地区からの参加は、初回が20名であったが、その後2回の活動を経て、10月末に行われた交流大会では、前年比の2.7倍となる41名の参加があった、この沿岸部からの参加者の増加も、活動支援による一つの成果である。

一般に、復興支援に向けた活動を行うにあたっては、支援の押し付けにならないよう、被災者のニーズの把握が求められる。支援の押し付けの例としては、ニーズに沿わずに偏って集まった救援物資が、深刻な保管場所の問題を引き起こしたことなどがあげられる。

健康づくりに向けたレクリエーションスポー

ツの活動支援を計画する際にも、被災者の意識がどのような状況にあるのかを把握することは、支援内容を検討する上で必要である。また、対象となる被災者が、被災地で様々な不自由を強いられる中で、レクリエーションスポーツに何を求めるのかを知ることは、いわゆる支援の押し売りにならないようにするためにも重要である。特に、震災で使用できなくなった運動施設の代わりに、他に使用できる施設を準備して提供する際に、激減している運動の機会をただ単に補うことに止まらず、積極的に運動の実施を促していくためには、対象者となるレクリエーションスポーツ愛好者のこれらスポーツへの参加の意義や動機などについて、震災がいかなる影響を与えたかについて把握することが必要である。

さらに、現在までに推測されている東南海沖地震とその被害を想定すれば、この活動支援の際に得られる情報を記録しておくことにも意味があると考えられる。

東日本大震災が被災地のレクリエーションスポーツ活動の愛好者の意識にいかなる影響を与えたかに関しては、2009年以降より毎年実施している「健康づくりスポーツへの参加意識についてのアンケート調査」のうち、震災の前後で実施した2010年と2011年の調査結果を用いて検討した。

この調査は、健康づくりスポーツへの参加動機や活動の継続などを調査するものであり、例年10月下旬頃に宮城県の柴田町で開催される「地域交流ビニールバレーボール大会」に参加する宮城県内のビニールバレーボールの愛好者を対象とした調査と、同様に12月中旬に岩手県花巻市で開催される「東日本イーハトーブビーチボール競技大会」に参加する岩手県内のビーチボール競技の愛好者を対象とした調査である。

このうち、前者の宮城県における調査では、健康づくりのためのレクリエーションスポーツへの参加意識が「楽しみながら皆と健康になる目的」から、「自分自身の身体的活動欲求が動機」に変化したことなどを報告<sup>2)</sup>したが、本研究では、後者の岩手県におけるビーチボール競技の

参加者の意識についても震災の影響を把握することを目的とし、今後の健康づくりスポーツによる活動支援に活用することを目指した。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

調査対象とした「ビーチボール競技」は富山県の朝日町が発祥となるレクリエーションスポーツである。昭和52年に、朝日町教育委員会が「町民ひとり1スポーツの推進」を重点目標とした軽スポーツの開発を体育指導委員協議会に提案したことから始まった。現在では全国から385チームが参加する大規模大会を開催するレクリエーション種目にまで発展している。

調査対象とした岩手県では、被害の大きかった沿岸部にある釜石市がこの朝日町と姉妹都市の関係にあり、東北6県の中でも岩手県はこの種目の愛好者が多い。この岩手県内では特に奥州市、花巻市などに愛好者が多く、各地域の協会では定期的な記念大会、交流大会などの比較的に大きな大会が相互に開催されており、その他の全国各地との交流、大会参加について積極的である。

調査の対象者は、岩手県で開催される大会で最も広域規模となる「東日本イーハトーブビーチボール競技大会」の参加者のうち、事前に目的や趣旨に同意を得た参加者に対して、アンケート質問用紙を用いて行った。この大会の参加対象となるチームは、男性または女性4名の性別で構成されたチームと、男性2名と女性2名で構成された混合チームであり、それぞれ年齢のカテゴリーで区分されている。

震災前の2010年は12月12日に実施し、岩手県内の回答者で86名（男性30名・女性56名、平均年齢 $33.4 \pm 10.4$ ）からの回答が得られ、震災後の2011年では震災のおよそ9ヵ月後となる12月18日に実施し、岩手県内の回答者で90名（男性36名・女性54名、平均年齢 $38.4 \pm 11.2$ ）の回答を得た。

### 2. 統計的検討

アンケートで得られた回答については、震災

前後での比較に、それぞれの項目の実数を率(%)で表した。また、有意差に関しては2×2表(Fisher's exact test)を用いた度数の分析を行い、有意水準は、 $p<0.05$ ,  $p<0.01$ をそれぞれ\*, \*\*として図中に記号で示した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 参加者の基本情報について

表1に回答者の性別、平均年齢、最小年齢、最高年齢を示し、図1-1に年齢分布、図1-2に居住地を示す。

震災前の男女数は男性が30人(34.9%)、女性が56人(65.1%)、震災後は男性が36人(40.0%)、女性が54人(60.0%)であり、いずれも回答数の60.0%以上が女性である。また、最小年齢は震災前が19歳、震災後で21歳であ

り、最高年齢は震災前が62歳、震災後が63歳である。平均年齢は震災前で35.2歳、震災後が42.2歳であった。

居住地では震災前で奥州市が最も多い47人(54.7%)、九戸村8人(9.3%)、花巻市7人(8.1%)、金ヶ崎町と北上市6人(7.0%)、二戸市3人(3.5%)、江刺市と釜石市、軽米町2人(2.3%)、盛岡市と遠野市、大槌町1人(1.2%)の順となり、震災後は奥州市56人(62.2%)、花巻市13人(14.4%)、江刺市7人(7.8%)、金ヶ崎町6人(6.7%)、釜石市4人(4.4%)、北上市3人(3.3%)、一関市1人(1.1%)の順となる。震災前後では、奥州市+9人(7.6%)、花巻市+6人(6.3%)、江刺市+5人(5.5%)、釜石市+2人(2.1%)の順で多くなり、九戸村-8人(-9.3%)、北上市-3人(-3.6%)の順で減少している。

表1 回答者について

		震災前	震災後
性別	男性	30人(34.9%)	36人(40.0%)
	女性	56人(65.1%)	54人(60.0%)
	合計	86人	90人
年齢	平均年齢	35.2歳 ± 10.37	42.2歳 ± 11.16
	最小年齢	19歳	21歳
	最高年齢	62歳	63歳

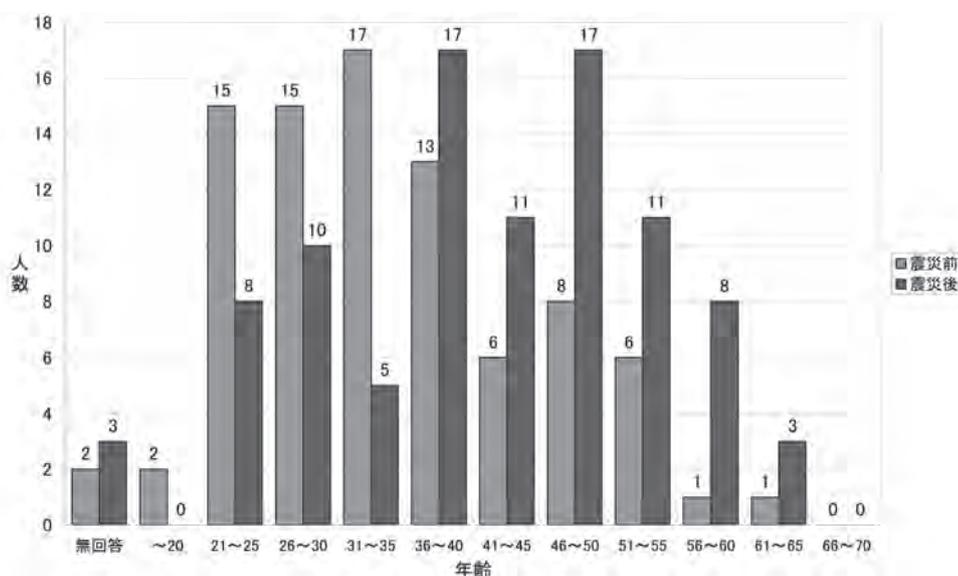


図1-1 年齢分布

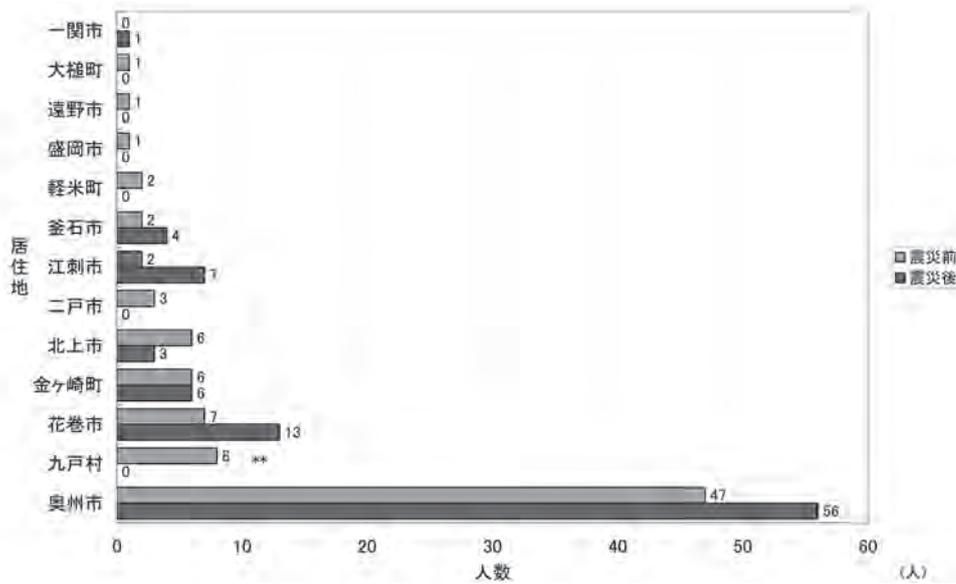


図 1-2 居住地

## 2. 活動への参加と継続について

図 2 に活動への参加のきっかけ, 図 3 に情報の元となるもの, 図 4 に活動への参加理由, 図 5 に活動の継続理由, 図 6 に運動やスポーツの継続条件を示す。

活動への参加のきっかけは, 震災前では「人に誘われた／薦められた」79 人 (91.9%), 「イベントに行った」15 人 (17.4%), 「広報を見た」5 人 (5.8%), 「クラブ HP を見た」3 人 (3.5%), 「チラシ・ポスターを見た」2 人 (2.3%), 「クラブ会報誌を見た」と「ラジオ／新聞報道を見た・聞いた」が 1 人 (1.2%) の順である。

震災後では, 「人に誘われた／薦められた」82 人 (91.1%), 「イベントに行った」18 人 (20.0%), 「広報を見た」6 人 (6.7%), 「クラブ会報誌を見た」3 人 (3.3%) の順であり, 「クラブ HP を見た」, 「チラシ・ポスターを見た」, 「ラジオ／新聞報道を見た・聞いた」については回答が無かった。

震災の前後ではクラブ HP を見た (-3.5%), チラシ・ポスターを見た (-2.3%), ラジオ／新聞報道を見た・聞いた (-1.2%) 人に誘われた／勧められた (-0.7%) の順で減少し, イベントに行った (+2.6%), クラブ会報誌を見た (+2.2%), 広報を見た (+0.9%), の順で増加している。

活動の情報の元となるものについては, 震災前で地域行事 32 人 (37.2%), 学校行事 10 人 (11.6%), 体育施設 5 人 (5.8%), 公民館 2 人 (2.3%), 市役所・町役場 1 人 (1.2%) の順であった。

震災後は体育施設 19 人 (21.1%), 地域行事 18 人 (20.0%), 学校行事 6 人 (6.7%), 公民館とクラブハウスが 2 人 (2.2%) の順であった。

震災の前後では, 地域行事 (-17.2%), 学校行事 (-5.0%), 市役所・町役場 (-1.2%) 公民館 (-0.1%) の順で減少し, 体育施設 (+15.3%), クラブハウス (+2.2%), の順に増加した。このうち, 地域行事の減少 ( $p < 0.05$ ) と体育施設の増加 ( $p < 0.001$ ) が有意であった。

また, 震災前後ともにその他の回答が多くあった。

活動への参加理由では, 震災前は「運動が好きだから」64 人 (74.4%), 「楽しみ・気晴らしのため」52 人 (60.5%), 「健康に効果的だから」33 人 (38.4%), 「友人・知人に誘われたから」33 人 (38.4%), 「競技に興味があった」23 人 (26.7%), 「美容や肥満解消のため」18 人 (20.9%), 「近くで開催されているから」7 人 (8.1%), 「好きなときに参加できるから」6 人 (7.0%), 「空いた時間ができたから」5 人 (5.8%), 「地域に友人をつくりたいから」4 人 (4.7%)

## 被災地の活動支援

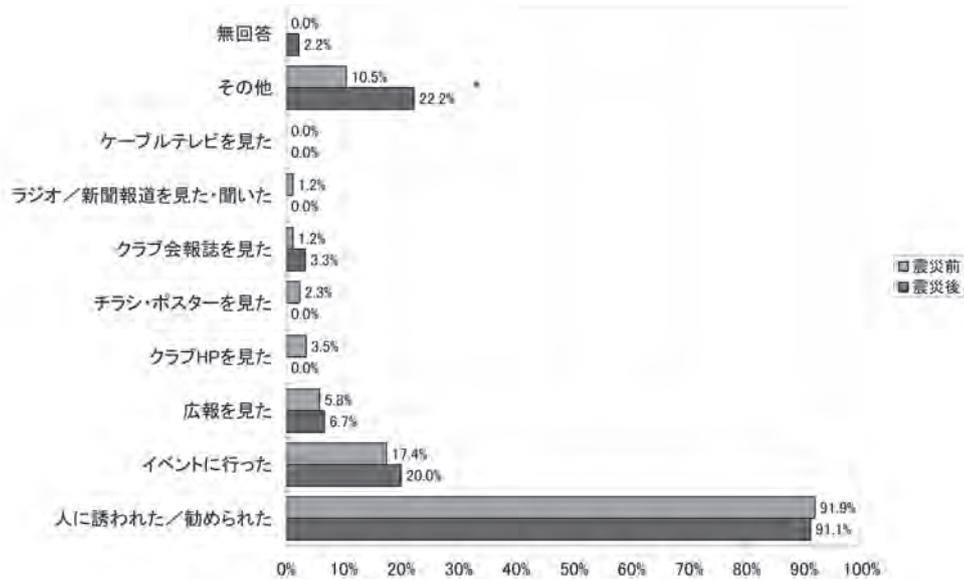


図2 活動への参加のきっかけ

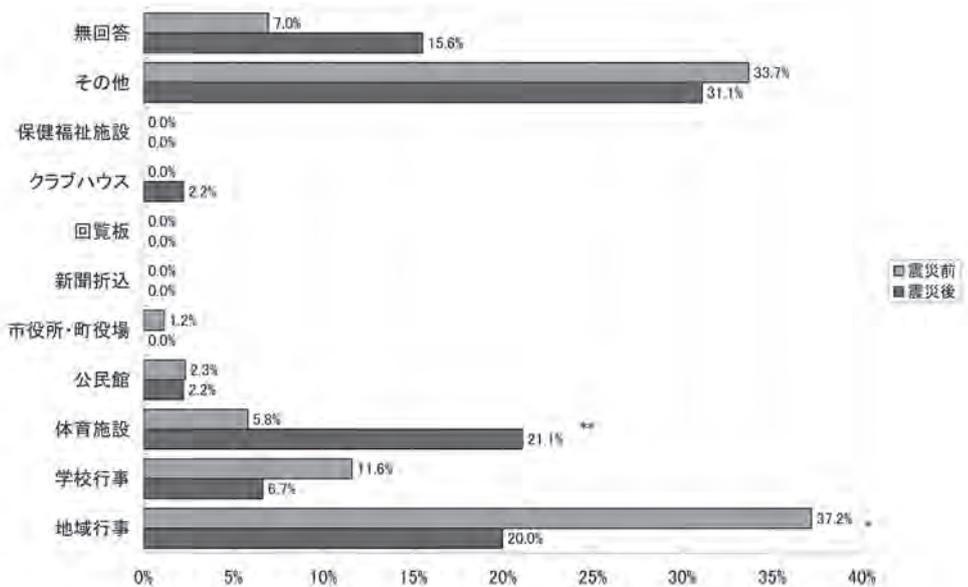


図3 活動の情報の元となるもの

の順であった。

震災後では、「運動が好きだから」62人(68.9%),「楽しみ・気晴らしのため」53人(58.9%),「健康に効果的だから」35人(38.9%),「競技に興味があった」32人(35.6%),「友人・知人に誘われたから」25人(27.8%),「美容や肥満解消のため」12人(13.3%),「地域に友人をつくりたいから」10人(11.1%),「近くで開催されているから」7人(7.8%),「好きなとき

に参加できるから」6人(6.7%),「空いた時間ができたから」4人(4.4%),「家族や友人に運動してもらいたかったから」と「運動の必要にせまられたから」が1人(1.1%)の順であった。

震災の前後では、「友人・知人に誘われたから」(-10.6%),「美容や肥満解消のため」(-7.6%),「運動が好きだから」(-5.5%),「楽しみ・気晴らしのため」(-1.6%),「空いた時間ができたから」(-1.4%),「近くで開催されているから」(-0.4%),

「好きなときに参加できるから」(-0.3%)の順に減少し、「競技に興味があった」(8.8%),「地域に友人をつくりたいから」(6.5%),「運動の必要にせまられたから」と「家族や友人に運動してもらいたかったから」(1.1%),「健康に効果的だから」(0.5%)の順に増加している。

活動の継続理由では、震災前は「運動して楽しい・爽快感が得られる」71人(82.6%),「仲間や友人ができた」49人(57.0%),「練習場所が近い・行きやすい」22人(25.6%),「行きたいときに行けるので気が楽である」21人(24.4%),「競技が自分に合っていた」18人(20.9%),「運動して体の調子が良くなった」14人(16.3%),「軽い運動でも効果があると感じた」と「参加することで自分に自信がつく」が11人(12.8%),「家族や友人が協力してくれる」10人(11.6%),「運動や体に関する情報が得られる」3人(3.5%),「運動していることを、指導者・家族・医者・友人などが褒めてくれた」と「満足のいく指導を受けることができた」が2人(2.3%),「運動を安全に行うことができる」1人(1.2%)の順であった。

震災後では、「運動して楽しい・爽快感が得られる」72人(80.0%),「仲間や友人ができた」48人(53.3%),「練習場所が近い・行きやすい」27人(30.0%),「競技が自分に合っていた」22人(24.4%),「行きたいときに行けるので気が楽である」13人(14.4%),「運動して体の調子が良くなった」13人(14.4%),「軽い運動でも効果があると感じた」11人(12.2%),「家族や友人が協力してくれる」10人(11.1%),「参加することで自分に自信がつく」8人(8.9%),「運動や体に関する情報が得られる」と「運動していることを、指導者・家族・医者・友人などが褒めてくれた」,「満足のいく指導を受けることができた」,「運動を安全に行うことができる」がそれぞれ1人(1.1%)の順であった。

震災の前後では、「行きたいときに行けるので気が楽である」(-10.0%),「参加することで自分に自信がつく」(-3.9%),「仲間や友人ができた」(-3.6%),「運動して楽しい・爽快感が得られる」(-2.6%),「運動や体に関する情報が得られる」(-2.4%),「運動して体の調子が良く

なった」(-1.8%),「運動していることを、指導者・家族・医者・友人などが褒めてくれた」と「満足のいく指導を受けることができた」が(-1.2%),「軽い運動でも効果があると感じた」(-0.6%),「家族や友人が協力してくれる」(-0.5%),「運動を安全に行うことができる」(-0.1%)の順に減少し、「練習場所が近い・行きやすい」(4.4%),「競技が自分に合っていた」(3.5%)の2つが増加した。

運動やスポーツの継続条件では、震災前は「一緒にできる仲間がいれば」65人(75.6%),「時間が合えば」と「運動できる施設が身近にあれば(通えれば)」が45人(52.3%),「出場できる大会等の目標があれば」22人(25.6%),「お金がかからなければ」18人(20.9%),「もっと体力がつけば」15人(17.4%),「加入できる地域クラブがあれば」10人(11.6%),「運動効果が上がるならば」9人(10.5%),「指導者がいれば」3人(3.5%),「もっと運動の必要性や効果を学べれば」2人(2.3%)の順であった。

震災後は「一緒にできる仲間がいれば」69人(76.7%),「運動できる施設が身近にあれば(通えれば)」50人(55.6%),「時間が合えば」38人(42.2%),「出場できる大会等の目標があれば」22人(24.4%),「運動効果が上がるならば」16人(17.8%),「もっと体力がつけば」14人(15.6%),「お金がかからなければ」9人(10.0%),「加入できる地域クラブがあれば」7人(7.8%),「指導者がいれば」4人(4.4%),「もっと運動の必要性や効果を学べれば」2人(2.2%),「健康相談ができれば」1人(1.1%)の順であった。

震災の前後では、「お金がかからなければ」(-10.9%),「時間が合えば」(-10.1%),「加入できる地域クラブがあれば」(-3.9%),「もっと体力がつけば」(-1.9%),「出場できる大会等の目標があれば」(-1.1%),「もっと運動の必要性や効果を学べれば」(-0.1%)の順に減少し、「運動効果が上がるならば」(7.3%),「運動できる施設が身近にあれば(通えれば)」(3.2%),「一緒にできる仲間がいれば」と「健康相談ができれば」が(1.1%),「指導者がいれば」(1.0%)の順に増加した。このうち、「お金がかからなければ」(-10.9%)の差が有意であった( $p < 0.05$ )。

## 被災地の活動支援

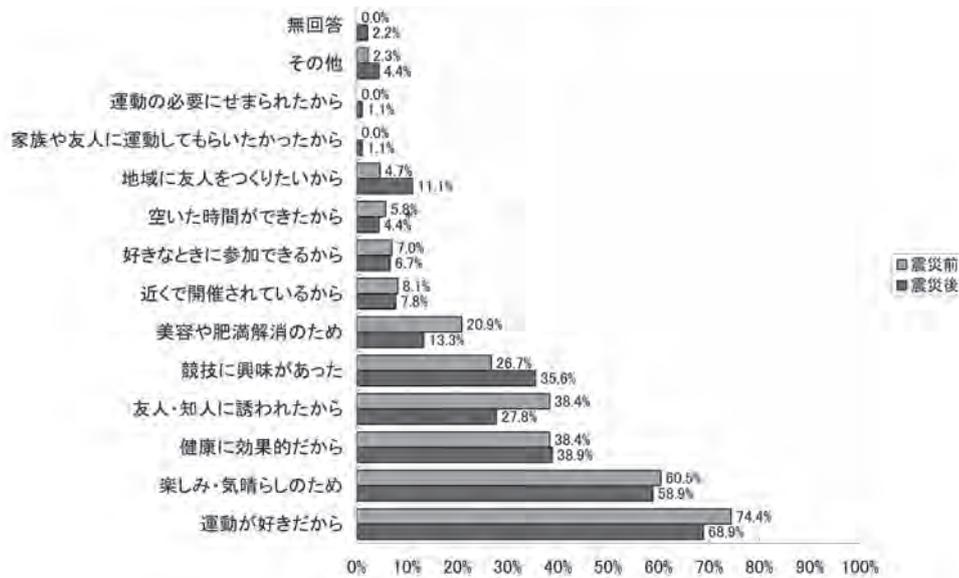


図4 活動への参加理由

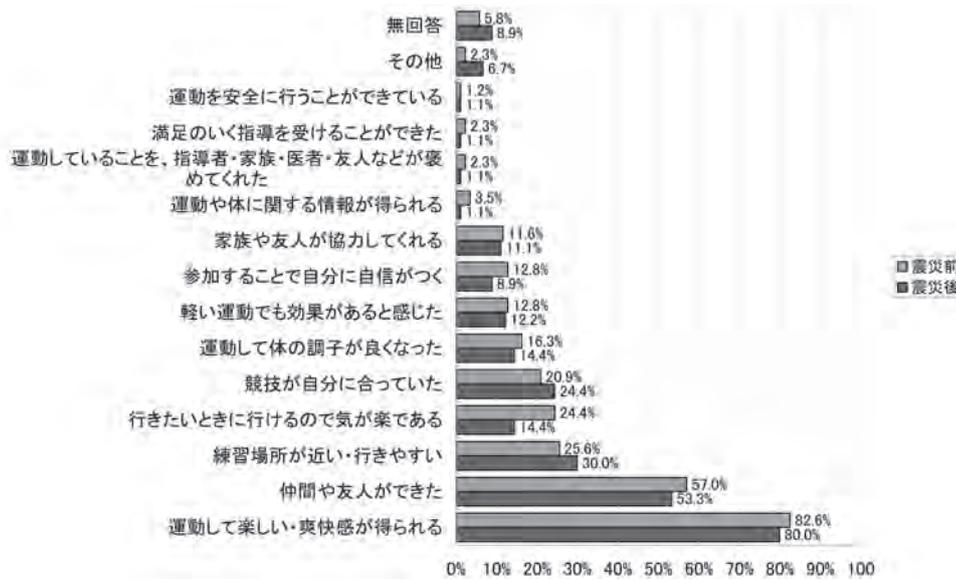


図5 活動の継続理由

## IV. 考察

### 1. 参加者の基本情報について

2012年10月の震災後の報道で社会体育関連記事の増加<sup>3)</sup>が見られたが、そのさらに2ヶ月後の同年12月の大会開催時に得られた情報である。この震災後の大会はその規模や内容などについて、震災前のものと異なりはなかったことから、参加者の参加のきっかけ、理由、年齢

構成などには特に差が無かったと考えられる。回答者の年代は、いわゆる未就業世代・高齢者を除いた18歳以上～65歳未満の範囲にある。30代～40代の参加者が多いが、60歳前後の参加者も少なくはない。

### 2. 活動への参加と継続について

#### 1) 活動への参加のきっかけ

活動への参加のきっかけの回答では「人に誘

われた／勧められた」が代表的であり、震災の前後ともに90.0%を超えている。既に活動に関わっている愛好者などからの勧誘などが有力であるなら、こうした活動を継続している愛好者やそのコミュニティへ働きかけを行うことが、健康づくりの支援活動を行うには効果的であることを調査結果は示している。

## 2) 活動の情報の元となるもの

活動の情報の元となるものの回答では、震災前は地域行事が37.2%と最も多く、学校行事の11.6%がこれに次ぐものとなっている。震災前では地域行事、学校行事が活動情報を共有する主な場であった。震災後は体育施設が最も多い21.1%であり、次いで、地域行事の20.0%であった。震災前後では地域行事を情報共有の場とする回答が少なくなったことと、体育施設を情報共有の場とする回答が多くなったことが有意である。震災前は地域行事や学校行事が主な情報共有の場であったが、震災後は練習などで利用する体育施設が情報共有の主な場へ変わったと考えられる。しかし、震災後の体育施設の回答率が21.1%に増加しているとはいえ、震災前の地域行事の回答率37.2%にかわるものではなく、震災後の地域行事の回答率も20.0%であることからみれば、地域や学校など、公共施設

が情報共有の場であることには変わりはない。また、地域や学校などの公共施設への回答が震災後に少なくなった理由としては、震災の直後から地域や学校、公共施設などは、耐震問題や放射能汚染、津波対策などの様々な対応が急務となる状況下にあったことや、安全性の問題などから使用できない施設が多くあったことなどが理由の一つとして考えられる。このように情報の共有の場が少なくなった中で、愛好者同士の動線上にある接点となる体育施設が、情報共有やコミュニケーションの場として多様化し、クラブハウスのような機能を持ったと考えられる。これに類して、司東ら<sup>4)</sup>は震災後の事例として「行政機関はその性格上、広く多くの人々に公平なサービスを行う必要があるため、大局的な視点での活動が優先され、支援を必要としている人が多ければ多いほど、個別的な対応は難しい」とし、行政機関に代わり、統合型スポーツクラブのコミュニティによる被災地支援活動が有意義であったことを報告している。

## 3) 活動への参加理由

活動への参加理由では、「運動が好きだから」と、「楽しみ・気晴らしのため」の回答が、震災の前後ともに50.0%を超えている。この2つの回答を含め、いずれの項目も有意な差はない。

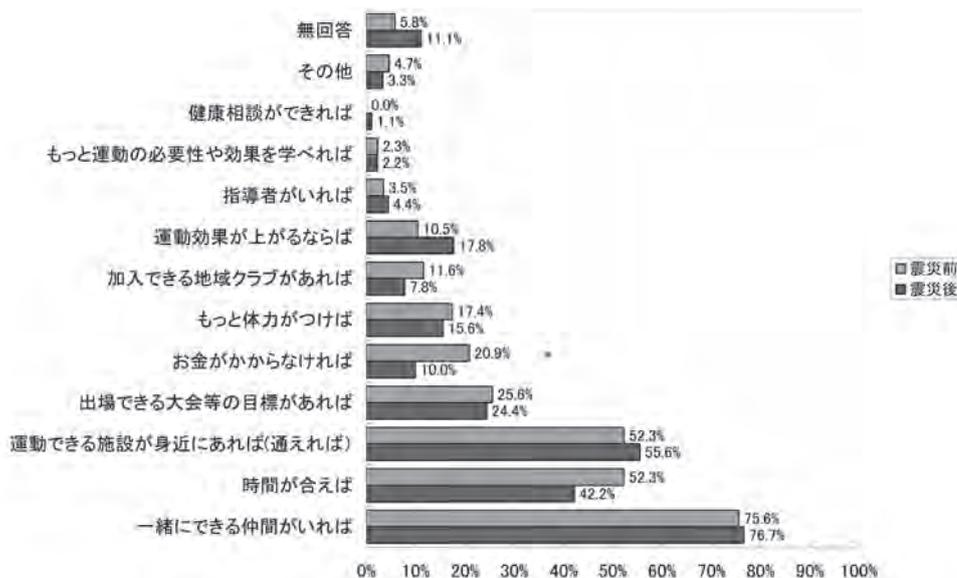


図6 運動やスポーツの継続条件

しかし、震災後には「他者からの誘い」、あるいは「美容や肥満解消」を目的とした参加理由が減少し、「競技への興味」、「地域の友人づくり」が増加した。すなわち、「友人・知人に誘われたから」が10.6%の減少、「美容や肥満解消のため」が7.6%の減少となり、逆に「競技に興味があった」が8.8%の増加、「地域に友人をつくりたいから」が6.5%の増加となった。これは、運動・スポーツ活動への参加理由が、主体的ではないもの（他者からの誘い、美容や肥満解消）から、主体的なもの（競技への興味、友人づくり）に変化していることを示唆している。この震災後の変化は、漠然と体を動かすことについての関心より、種目や競技に参加することによる人との関わりを通し、それを行うことの楽しみが求められるようになったと考えられる。

#### 4) 活動の継続理由

活動の継続理由では、「運動して楽しい・爽快がある」ということ、「仲間や友人ができた」ということが、震災の前後ともに50.0%を越える代表的な回答である。この2つの回答を含め、いずれの項目にも有意な差は無い。活動の継続理由の中では、「行きたいときに行けるので気が楽である」が10.0%の減少を示したが、この回答に照らせば、震災から9ヶ月ほど経過しているとはいえ、震災の影響によることが示唆されている。

#### 5) 運動やスポーツの継続条件

運動やスポーツの継続条件では、震災の前後ともに50.0%を超えている回答は、「一緒に出る仲間がいれば」と、「運動できる施設が身近にあれば」の2つである。その他の回答のうち、「お金がかからなければ」で10.9%の減少があり、有意な差が認められた。また、「時間が合えば」で10.1%が減少しており、逆に「運動効果が上がるならば」で7.3%増加した。「お金と時間」の条件で減少し、運動の「効果」を求める条件で増加するといった、いわゆる対費用効果に特徴的な条件に増減があったことを示唆している。以上の回答に照らせば、震災後には身近な施設であることと、一緒に出る仲間

がいることが継続条件であり、さらに、運動の効果を求める傾向があることを確認できる。

### 3. 宮城県の調査結果との比較について

宮城県の調査は、被災者への活動支援と平行して実施しており、情報提供の手段、使用する施設、実施内容など、参加者の様子を探りながら検討を繰り返した。手探り状態ではあったが、この活動に直接的に取り組む中で、より良い活動支援となるよう様々な情報収集を行った。この調査結果からは、健康づくりのためのレクリエーションスポーツへの参加意識が「楽しみながら皆と健康になる目的」から、「自分自身の身体的活動欲求が動機」に変化したと結論付けている。本研究の調査結果の各項目で50%を超える回答では表2-1の通り、宮城県の調査結果との類似点が多い。しかし、震災前後における回答の傾向については表2-2の通り、増減の変化に逆の傾向が見られている回答が多い。この中の活動の情報元を地域行事と回答したものについては、どちらにも有意な差が認められている。この理由の一つとして、各市町村協会の連携をまとめる中央協会（県協会）の有無などが考えられ、各地域を取りまとめる中央協会の無い宮城県では、ビニールバレーボールのイベントの殆どが地域ごとに独立して行われることが影響していると考えられる。これらの通り、各項目で上位の回答でみれば、侘美ら<sup>5)</sup>の挙げている健康づくりのための習慣的な運動継続の必要条件である「楽しいこと」、「活動の場が身近にあること」、「仲間がいること」、「上達や自分自身の変化が自覚できること」、「新しい出会いや発見があること」の内容に沿う結果となる。しかし、震災後の回答の変化の傾向に照らせば、宮城県と岩手県でのそれぞれの状況の違いが、「活動に参加することの意義」と「参加の動機となる事柄」に見られていることが示唆された。

## V. まとめ

激震地であった岩手県も、震災後、損壊を免れた体育館の多くが避難所となり、そこではエコノミー症候群の予防を促す働きかけや情報提

表 2-1 岩手県と宮城県での調査結果の比較（震災後の 50%を超える回答について）

	岩手県の調査結果		宮城県の調査結果	
参加のきっかけ	人に誘われた／勧められた	(91.1%)	人に誘われた／勧められた	(90.2%)
活動の参加理由	運動が好きだから	(68.9%)	運動が好きだから	(60.7%)
	楽しみ・気晴らしのため	(58.9%)	楽しみ・気晴らしのため	(57.8%)
活動の継続理由	健康に効果的だから	(56.6%)	健康に効果的だから	(56.6%)
	運動して楽しい・爽快感が得られる	(80.0%)	運動して楽しい・爽快感が得られる	(80.9%)
運動やスポーツの継続条件	仲間や友人ができた	(53.3%)	仲間や友人ができた	(55.5%)
	一緒にできる仲間がいれば	(76.7%)	一緒にできる仲間がいれば	(69.4%)
	運動できる施設が身近にあれば	(55.6%)		

表 2-2 岩手県と宮城県の調査結果の比較（震災前後の傾向が異なる回答について）

		岩手県での調査結果		宮城県での調査結果	
		震災後	増減	震災後	増減
参加の きっかけ	人に誘われた／勧められた	91.1%	-0.7%	90.2%	-5.8%
	イベントに行った	20.0%	2.6%	17.3%	-7.8%
	広報を見た	6.7%	0.9%	3.5%	-5.5%*
	クラブHPを見た	0.0%	-3.5%	4.6%	1.3%
	ラジオ／新聞報道を見た・聞いた	0.0%	-1.2%	2.3%	1.8%
活動の情報元	地域行事	20.0%	-17.2%*	45.1%	18.3%**
活動の 参加理由	運動が好きだから	68.9%	-5.5%	60.7%	2.6%
	楽しみ・気晴らしのため	58.9%	-1.6%	57.8%	3.1%
	健康に効果的だから	38.9%	0.5%	56.6%	-0.9%
	美容や肌荒れ解消のため	13.3%	-7.6%	13.9%	6.6%*
	近くで開催されているから	7.8%	-0.4%	13.9%	2.1%
	空いた時間ができたから	4.4%	-1.4%	3.5%	0.1%
	地域に友人をつくりたいから	11.1%	6.5%	9.8%	-8.1%*
	家族や友人に運動してもらいたかったから	1.1%	1.1%	0.0%	-3.4%*
活動の 継続理由	行きたいときにいけるので気が楽である	14.4%	-10.0%	12.1%	0.4%
	軽い運動でも効果があると感じた	12.2%	-0.6%	16.8%	2.8%
	参加することで自分に自信がつく	8.9%	-3.9%	6.4%	0.2%
	運動や体に関する情報が得られる	1.1%	-2.4%	2.3%	1.2%
	運動していることを、指導者・家族・医者・友人などが褒めてくれた	1.1%	-1.2%	1.2%	0.6%
	満足のいく指導を受けることができた	1.1%	-1.2%	0.6%	0.6%
運動や スポーツの 継続条件	一緒にできる仲間がいれば	76.7%	1.1%	69.4%	-9.4%*
	もっと体力がつけば	15.6%	-1.9%	24.3%	1.4%
	加入できる地域クラブがあれば	7.8%	-3.9%	18.5%	6.2%
	運動効果上がるならば	17.8%	7.3%	15.0%	-1.7%
	もっと運動の必要性や効果を知れば	2.2%	-0.1%	5.2%	3.0%

※ 有意水準  $p<0.05$ ,  $p<0.01$  をそれぞれ\*, \*\*とした

供が日常的に行われている。仮設住宅の整備が進むとともに、避難所から仮設住宅にその場所を移して、健康づくり運動を目的としたボランティアによるレクリエーション活動が継続的に行われるようになった。

レクリエーション活動は誰もが手軽にできる活動<sup>6)7)</sup>であり、ビーチボール競技もまた「いつでも、どこでも、だれでも」というスローガンの下に活動が展開されている。レクリエーション活動が身体の健康にもたらすとされる効果については、これまでも多くの研究<sup>8)9)</sup>によって報告されており、また、健康維持増進といった観点から習慣的な継続が求められている。こうした意味では健康不安を持つ被災地の人たちに向けた、健康づくりスポーツの活動支援は必要不可欠であると言えるが、いわゆる支援の押し付けになってしまわないようにすることが必要である。本研究の調査結果が示唆していることは、被災の状況によって変わる、被災者の「活動に参加することの意義」や「参加の動機となる事柄」を把握すること、さらに健康づくりスポーツの活動支援を計画するにあたっては、(1)身近な施設で仲間や友人とともに好きなスポーツや競技を楽しむことや良い気分転換ができる、ということを目標設定に置くこと、(2)活動支援の対象となる者の活動の動線上の体育施設などの公共施設や、対象者の所属するコミュニティでの情報収集、及び情報提供などを通して積極的な働きかけを行うことである。二塚<sup>10)</sup>が「大震災で考えること」とした論述の中で「追体験できないわが身をしっかりと受け止めて、他者をおもんばかり。他者を他者とし、当事者ではないことの限界を感じつつ、他人ごととしてではなく、社会の問題をとらえようとする。これこそが、実はいま、私どもに切に求められている社会的想像力なのではないだろうか。」と述べていることが、まさにこうしたことに通ずるものであろう。

## 文献

- 1) 原章展, 平田竹男 (2011) 東日本大震災がスポーツイベントに与えた損害に関する調査, スポーツ産業学研究 21 (2), 195-205
- 2) 内野秀哲, 後藤満枝 (2012) 被災地におけるレクリエーションスポーツ活動への参加意識の変化について: -被災地の活動支援におけるアンケート調査から-, 仙台大学紀要 44 (1), 10-14
- 3) 亀山有希, 関芽 (2012) 東日本大震災の震災地におけるスポーツ文化復興プロセスに関する一考察 石巻日日新聞の記事分析を通じて, 日本体育大学紀要 42 (1), 9-24
- 4) 司東道雄, 黒須充, 佐藤さくら (2012) NPO法人フォルダにおける被災地支援活動と地域コミュニティの再生, スポーツ産業学研究 22 (1), 237-244
- 5) 佐美靖, 黒澤奈緒 (2003) ミニバレーの運動特性と健康増進効果, 北海道大学教育学研究科紀要 88, 221-234
- 6) 山崎清男 (1999) 生涯スポーツに関する一考察: 生涯学習としてのスポーツ, 大分大学教育福祉科学部研究紀要 21 (2), 383-394
- 7) 井筒次郎 (1992) スポーツとレクリエーション, 理学情報ジャーナル 26, 218-223
- 8) 杉浦春雄, 西田弘之, 杉浦浩子 (2003) レクリエーション活動前後の気分プロフィール (POMS) の変化について, 岐阜薬科大学基礎教育系紀要 15, 17-33
- 9) 橋本公雄, 徳永幹雄 (2002) 運動参加タイプとその特性: 健康関連要因に基づく分析, 健康化学 24, 47-55
- 10) 二塚信 (2012) 特集】東日本大震災～被災地における支援活動の体験～ 1. 大震災の中で考えること, 九州看護福祉大学紀要 12 (1), 3-4
- 11) 報道発表資料, 東日本大震災による被害情報について (第 194 報), 文部科学省, 2011, 5.24

( 2012年11月30日受付 )  
( 2013年2月6日受理 )